



Title	初代伊東陶山の業績について : 京都陶磁器業への貢献と帝室技芸員任命について
Author(s)	北山, 明乃
Citation	デザイン理論. 2021, 77, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78325
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

初代伊東陶山の業績について

京都陶磁器業への貢献と帝室技芸員任命について

北山 明乃 京都女子大学大学院 博士前期課程

はじめに

初代伊東陶山（1846-1920）は、明治後期から大正期にかけて活動した京焼の陶工である。新しい釉薬の開発や陶磁器組合の統一を主導するなど明治後期以降の京焼振興に功績を残した。特に京都の陶磁器におけるデザイン改革を推し進めた遊陶園の結成時のメンバーであり、琳派風の意匠を取り入れた作品を制作。大正 6 年には帝室技芸員に任命されている。約 58 年間に帝室技芸員に任命された陶工や陶芸家は 5 名のみであり、近代日本を代表する陶芸家の一人であるといえよう。

しかしながら、陶山は帝室技芸員に任命された他の 4 名（三代清風興平、初代宮川香山、初代諏訪蘇山、板谷波山）に比べると、現存が知られる資料は限られており、展覧会等で作品を目にする機会は少ない。そこで本論では、初代伊東陶山に関する資料を研究対象としてこの陶工の業績を明らかにすることを目的としている。

1. 初代伊東陶山に関する先行研究

陶山以外の 4 名の帝室技芸員はいずれも京都以外の都市との繋がりから研究されてきた。初代宮川香山は京都で生まれたが工房のある横浜市で作陶を続けた。三代清風興平と初代諏訪蘇山は京都で活動したが、出身地はそれぞれ兵庫県と石川県である。板谷波山は文化勲章受章者として語られることの方が多く、他の帝室技芸員とは異なる紹介をされてきた。

このように近代陶磁研究の多寡には、出身地と活躍した場所がどこであったかということが関わっ

ている。陶山が生まれ活躍した京都は平安遷都以来の文化資源の集積地である。京焼の最高峰は江戸時代の野々村仁清や尾形乾山とされている中で、近代の陶芸家を紹介する機会は少ないのが現状だ。更に、国指定の伝統的工芸品は京焼・清水焼を含めて 17 種類にも上る。そのため他の陶磁器産地のように京焼・清水焼だけに焦点を当てるわけにもいかなかった。

とはいえ、これまでに陶山の研究が全く存在しなかったわけではない。平成 22 年には愛知県立陶磁資料館で「明治の人間国宝 ― 帝室技芸員の技と美 清風興平・宮川香山から板谷波山まで ―」が開催された。本展では 16 点の陶山の作品が出品され、公立美術館が主催する戦後最大級の陶山作品の展示だったと推測される。他にも関和男氏と吉田和夫氏による歴代陶山らの落款調査や、森下愛子氏、尾野善裕氏らによる収集・寄贈に陶山が関わった作品についての研究が挙げられる。

2. 初代伊東陶山の生涯と業績

陶山は弘化 3 年に山城国愛宕郡粟田領で生まれた。安政 4 年に円山派の画家である小泉東岳に弟子入りし、茶碗の絵付けや手びねりによる土瓶の制作を手伝う。これが陶業との出会いとなった。文久 3 年には東岳の勧めによって陶業の道を志す。まず和漢の陶法に精通していたという五条坂の陶工・亀屋旭亭に師事し、その後も五条坂や粟田の諸家に学んだ。そして信楽、美濃、瀬戸など全国の有名な窯業地を巡り、それぞれで研鑽を積んだ

という。このように多くの師を持ち様々な技術に触れていることは陶山の業績の中で同時代の陶工と異なる点といえる。そして、慶應3年に祇園に自らの店を構えた。号に陶山を初めて用いたのもこの頃である。

以下、開業以降の陶山の業績を四つの観点から紹介する。まずは粟田焼の復興である。彼が工房を構えていた粟田は江戸時代から続く京焼の一大産地で、明治初期には神戸港からの外国向け輸出で生産を伸ばした。しかし明治15年から始まった松方デフレによる不況で深刻な販売不振に陥り、次第に粗悪品が横行するようになる。このような状況を踏まえて、陶山は粟田焼復活のため材料の研究に取り組む。近辺の山川から収集した土石、鉱物などを研究し、従来の粟田焼にはなかった多くの技術を開発した。明治10年には既に「墨絵濃淡染付法」を発明していたが、その後もこの道を邁進し明治19年から大正9年にかけての発明品は36種に上る。そして、これらの新技術を同業者に公開したという。後述する業績についても、粗製乱造に陥っていた粟田焼を改善するという目的を念頭に置いてのものであったのだろう。

次に京都陶磁器業界の基礎改革である。陶山は明治29年に京都市陶磁器商工組合の頭取に就任し、地域の陶業者を代表する立場として様々な活動に関わるようになる。その中でも顕著なのは京都市立陶磁器試験場と附属伝習所の設立だろう。京焼の堅実な発展を促すために陶磁器の製法を科学的に研究する施設、ひいては子弟を教育する施設の設定が求められた。陶磁器商工組合が主体となり陶磁器事業者や学者など38名が京都市に働きかけた。京都市陶磁器試験所は五条坂にて同年、附属伝習所は明治33年に設立されている。

三つ目は意匠改革への着手である。これは粗製濫造と共に粟田焼が抱える問題であった。しかし明治時代前半を通して欧米では日本的な装飾が好まれるとされていたため、積極的な意匠改革に着手できなかった。この風潮に危機感を覚えた中沢

岩太(1858-1943)は、明治36年に陶磁器の意匠研究団体「遊陶園」を結成した。遊陶園の特徴は図案家考案の意匠を基に陶芸家が作品を制作する協力体制である。遊陶園の活動で陶山が制作した作品はいくつか図版が伝わっており、陶山には珍しい幾何学模様の作品も見られる。

最後に、古陶磁の収集と寄贈である。京焼の陶工が他産地より評価されていた理由の一つに古陶磁の写しの技術の高さがある。これは顧客である京都の寺院や歴史ある商家などが所蔵する古陶磁を閲覧する機会に恵まれていたためであった。陶山自身も古陶磁を収集し、他者から閲覧を望まれば断ることはなかったという。大正8年の皇太子御成年に際して、彼はそれらを帝室博物館に寄贈している。前述の尾野氏の調査によって京都帝室博物館に37点、奈良帝室博物館に29点の全66点であったことが判明している。産地の内訳は京焼を中心とする日本製が9割以上を占めており、日本の伝統に立ち返る陶山の指向を窺い知ることができる。

おわりに

本研究によって、これまで陶山の研究が進まなかった要因のひとつに、彼が日本工芸の中心であった京都で生まれ活躍した作家であることが関わっている可能性が見えてきた。更に、陶山は明治半ばから粟田焼を含む京焼全体の発展を目的として、組合の統合や、試験場の創設、技術や収集したコレクションの公開などを行っていたことが明らかとなった。作品の評価の高さだけではなく、そのような活動が帝室技芸員任命に繋がったことが考えられる。